

万葉図書・情報室だより59号

十進分類法のはじまり

図書館の書籍は図書分類法（十進分類法も含む）で分類し、配架されています。分類とは、書籍の背表紙に貼られたラベルの数字を指します。近代における図書分類はフランシス・ベークン（1561～1626）（※1）の知識分類が始まりです。人間の心理である理性・記憶・想像力をもとに、知識を哲学・歴史・詩に分類しました。

その後、ベークンから続く分類体系と十進記号法（0～9のアラビア数字を用いる）を合わせた分類法が1876年に発表されました。メルヴィル・デュイ（1851～1931）（※2）の、デュイ十進分類法（Dewey Decimal Classification・DDC）です。そのDDCを参考にして、日本十進分類法（Nippon Decimal Classification・NDC）が作られました。1928年に森清が勤務先である「問宮商店」（図書館用品専門店）の業務参考用図書のコレクション整理のために分類表を作成したことが

始まりです。同年、森清は「和洋図書共用十進分類法案」を発表しました。翌年には問宮商店店主であり、青年図書館員連盟を組織していた問宮不二雄が『日本十進分類法』と改題し、単行書として刊行しました。

現在では新訂10版が発行され、日本の多くの図書館でNDCが使われています。当館の分類もNDCにならっており、『万葉集』についての書籍は「M」で独自分類しています。

（※1）イギリス・ロンドン生まれ。

哲学者、政治家。子爵。主な著作に『学問の進歩』。検事総長や枢密顧問官にも任命されました。

（※2）アメリカ・ニューヨーク生まれ。コロンビア大学で主任司書、図書館経済学の教授となり、ニューヨーク州立図書館館長も務めました。

（参考）

- 『世界大百科事典』、平凡社
- 『日本十進分類法 新訂9版』
- 『世界人名辞典』、岩波書店

公開図書館のはじまり

万葉図書・情報室の蔵書をNDCの分類番号で並べると一番最初にくる本は桑原蓼軒著『日本最初の公開図書館 芸亭院』です。

芸亭について「我が国奈良時代後期、即ち八世紀の終わり頃、現在の公共図書館に匹敵する書籍閲覧所が、その中国に先んじ、又世界のいずれの国にも先がけて、文化人であるわが在朝の一貴族により首都奈良の地に営まれていた。」と序説に書かれています。その「在朝の一貴族」が石上宅嗣（奈良時代後期の高官、文人）です。

宅嗣は仏教に帰依し、自宅を寺にして阿闍寺と名付けました。その境内の一隅に内典（仏教の書）の理解の助けとなるように外典（仏教関係以外の書）を集め、好学者の者が閲覧できるように門戸をひらきました。これが公開図書館 芸亭のはじまりです。芸亭には、思託（鑑真の弟子）、淡海三船（文人）、賀陽豊年（文人）などが、講演や討論にも集まったと考えられています。

文人でもある宅嗣は『万葉集』に

歌を残しています。天平勝宝五年（七五三）正月に自宅で宴を催した時に詠んだ歌です。

事繁みあひ問はなくに
梅の花雪に萎れて移ろはむかも

（巻十九ー四二八二 中西進編『万葉集 全訳注原文付』より）
また、『唐大和上東征伝』などに漢詩も残しています。

現在、宅嗣の業績を賛えその趣旨が生かされるよう、芸亭があったとされる奈良市立一条高校の東側に奈良県図書館協会によって標識が建てられています。また、石上氏発祥の地として、天理大学附属図書館の前には顕彰碑が建てられています。



利用案内

開館時間ー午前10時～午後五時半

休館日ー月曜日（祝日の場合は翌

平日）・年末年始・展示替日

図書室のご利用は無料です。

閲覧でのご利用になります。

コピーサービス 白 黒一枚 10円

カラー一枚 50円

奈良県立万葉文化館万葉図書・情報室

奈良県高市郡明日香村飛鳥一〇

0744-54-1850（代）